令和７年度　学校評価表　阿波市立阿波中学校

項目	具体的努力目標	自己評価 達成状況	4段階評価	改善策	学校関係者評価 4段階評価	学校関係者評価 御意見
①豊かな心の育成	○人権学習、道徳教育 情報モラル教育の充実	○道徳科などの時数を確保し、多様な教材や手法を用いた、人権学習、道徳教育、情報モラル教育を実施した。(校内研修の実施) ○徳島県人権主事研修会および阿波市人権教育研究大会、校内人権に関する意見発表会、阿波市人権講演会、携帯安全教室、デートDV防止教室、命の授業、性の多様性についてなどの学習を通して、生徒の人権意識・道徳性が高まった。級友と自分の気持ちを語り合い、互いに認めたり、絆を深めたりすることができた。また、96%を超える生徒が、人権学習や道徳の時間に真剣に取り組み、自分や友達の人権を大切にできていると考えている。(学校生活に関するアンケート調査より) ○インターネット(SNS)を通じてのトラブルに対して、個別・全体指導を行った。 ○インターネットによる人権侵害、性の多様性に関する問題、災害に対する人権問題など、新しい人権課題に取り組み、偏見や差別解消に向けて生徒とともに教職員も学びを深めた。	A	○各種講演会やゲストティーチャーによる出前教室などを引き続き行う。 ○保護者も含めた啓発活動を引き続き行う。(講演会の案内、学校からの各種通信、生徒と保護者で共に考える機会の工夫) インターネット(SNS)による人権侵害や、新しい人権課題について今後も職員で研修を深めていく。 ○新しい人権問題だけでなく、部落差別などについても、学びを深めていく。	A	○生徒のアンケート回答が全体的にポジティブな結果となっており、学校の雰囲気が明るいと感じる。 ○教職員の自己評価からも取組に手応えを感じているのことが伝わってくる。 ○今年度「阿波市人権教育研究大会」に、会場校として取り組んだ成果が感じられる。今後も取組を継続してほしい。 ○基本的な生活習慣や規範意識の確立のための指導がよくできている。 ○今年度開設した「校内教育支援センター」の取組に、大きな成果が見られる。生徒の居場所をつくるという思いが体現されている。今後、さらに取組を定着させて継続していくことを期待している ○あいさつや行事の際の生徒の姿勢に阿波中学校の伝統が感じられる。 ○充実した体験的な活動や、生徒が主体となった活動がよくできている。思春期は、経験・体験すること、失敗してみることが大切だと思うので、そのような機会を多く設けて生徒の心の成長を後押ししてほしい。
	○生徒指導の充実	○約7割以上の生徒が学校にいじめ等の悩みを相談できている。(学校生活によるアンケート調査より) ○9割を越える生徒が、学校の規則やマナーを守れている。(学校生活によるアンケート調査より) ○各種関連機関(スクールカウンセラー、適応指導教室、スクールソーシャルワーカー、医療機関、県や市の相談員)との連携ができて いる。 ○学校に来られない生徒がいるが、その生徒に対する粘り強い支援や家庭との連携ができている。 ○校則に関して、話し合いを行い、生徒と教職員がともに校則の在り方を見直した。今年度は防寒着について校則を改定した。 ○生徒や保護者に対して、カウンセリングや悩み相談ダイアルなどの相談窓口を紹介している。 ○生活アンケートを通して日頃の悩みや思いを伝える機会を設けている。	A	○保護者と連携しながら、粘り強い支援を継続して行う。 ○教員同士の共通理解を徹底し、きめ細かい生徒指導を行う。(いじめや不登校の未然防止と早期発見早期対応) ○校内支援教室の来年度設置に向けて、話し合いや準備を進めている。 ○スクールカウンセラー、適応指導教室、スクールソーシャルワーカー等との連携を継続して行う。 ○礼儀・あいさつなどの伝統を継承し、自尊感情を育てていく。 ○時代の変化に対応した校則のあり方を模索しながら、生徒の成長を促す。 ○生徒指導研修を取り入れ、チーム阿波中として一丸となって生徒の命と人権を守る。	A	
	○体験的な活動や生徒が主体となった活動の充実 ○校内美化活動の充実	○ゲストティーチャーを招聘してのキャリア教育、職業インタビューや職場体験学習、上級学校調べ、福祉体験学習などの体験的活動に主体的に取り組み、自分の将来や生き方について考えることができた。 ○六稜祭や体育祭、合唱コンクールでは、生徒が主体的に考え、実施することができた。 ○委員会・ユニバース活動・各種行事などの異学年交流により、先輩から学び後輩を思いやる気持ち、学年の壁を越えて学校や学年、自分自身をよりよくしていこうという気持ちを育むことができた。 ○校内美化に心がけていると考えている生徒が9割を越えている。(学校生活によるアンケート調査より) しかし、時間いっぱい清掃に取り組めていない生徒もいる。 ○積極的にボランティア活動を行う生徒が増えつつある。	B	○体験的活動や学校行事などの目的や狙いを生徒にはっきりと継続して伝える。 ○学習活動のふり返りを工夫し、適切な評価をもとに、次の学習活動につなげる。 ○自分の分担場所を時間いっぱい清掃活動ができるように指導する。引き続き、教員も生徒とともに、清掃活動を行い、校内美化に努める。	A	
②確かな学力の育成・特別支援教育の推進	○授業改善の推進	○家庭学習の習慣について、学年によってばらつきはあるが、生徒は全体の3割、保護者は3割が不十分と答えているのが課題である。 ○研究授業を参観し合い、授業力の向上に努めている。各教科での参観授業やメンター研修の異教科間の公開授業を行った。 ○学校で意欲的に授業に取り組めている生徒は、どの学年も8割を超えている。 ○「話す」・「書く」等の表現力が身につくように、新聞の視写活動や記事紹介活動を通して、「話す」・「書く」の場面を設定している。努力している生徒は、全体で9割に近い。 ○効果的に使える場面でデジタル教科書を使って授業を進めている。一人一台端末を効果的に授業に取り入れられるように実践している。 ○ペア学習やグループ学習等で意見交換する場を設定し、活動させた。95%程度の生徒が主体的に活動できていると感じている。活動に消極的な生徒や 「話す」「書く」の表現がつくように努力できていると感じられない生徒も1割程度いる。 ○授業中の小テストやセミナーテストを計画的に実施することができた。 ○定期テスト前には、学習計画を立てさせ、学習時間を記録し見通しをもって学習ができるように支援した。	A	○研究授業の計画的な実施・活性化 ○勉強の仕方や自主勉強の仕方を友達同士で教え、学び合う。 ○すべての生徒が活動に参加できるように、ペアの組み方を工夫したりスモールティーチャーを育成したりする。 ○頑張りの見える化(読書量、勉強時間など)を行う。 ○ICTの効果的な活用の仕方について研修を行う。 ○授業のめあてを提示し、最後に授業の振り返りを徹底して行う	A	○生徒は、学校で意欲的に授業に取り組めている。 ○ICTを使いこなせるようになることはこれからの時代に必要なことではあるが、あくまでツールであることをふまえて活用していくことが必要である。学校でしかできない体験的な部分を大切にしていってほしい。 ○情報の取捨選択をする力を養っていく必要がある。生成AIなどのかかわり方、使いこなし方など、デジタルとアナログのバランスが重要である。 ○中高一貫教育の連携は、進路における多様なニーズに対する選択肢の一つとして、とてもありがたいと思う。 ○さまざまな高校の特長等に注目・比較させることで自分の将来を考える根拠がより確かなものになると思う。 ○キャリア教育のゲストティーチャーとして、本校の卒業した高校生や大学生と直接交流するのもよいのではないかと思う。
	○キャリア教育の充実	○将来の進路や職業について考えることができる生徒の割合は、どの学年も8割以上である。 ○家庭で進路のことについて話ができていない生徒が約2割いる。 ○各学年の発達段階に応じたキャリア教育の推進ができた。 ○キャリアパスポートを活用し、学習や行事の振り返りを行い、次年度につなげることができた。 ○阿波文化の学習に取り組み、徳島県の良さを学習することができた。あわ文化大使として活動をする生徒もいた。あわ文化検定では、多くの合格者がでた。	B	○三者面談等で、生徒の発達段階に応じて進路の情報を伝え、家庭で話し合いのきっかけをつくる。 ○本校の「キャリア教育」としての取組を理解してもらえるように、ホームページや学年通信を通して、継続的に啓発していく。 ○職業インタビューや職場体験学習、上級学校調べ、体験入学、進路希望調査を通して、家庭で将来について話し合う機会をもたせる。 ○清掃活動、挨拶の励行・指導を通して、社会人としてのマナーや態度を育てる。	B	
	○特別支援教育の充実	○特別支援学級に在籍している生徒については、教育支援計画や個別の指導計画を作成し、一人一人に応じた支援を行った。 ○年間に4回校内教育支援委員会を開催し、特別な支援が必要な生徒について生徒理解を行い、教員間で共通理解を図った。 ○特別な支援が必要な生徒について、保護者や関係機関と連携がとれている。 ○全教職員がe-ラーニングによる研修を行い、特別支援教育についての知識を深め、支援の仕方などを学んだ。	A	○全校体制で特別支援教育に取り組めるようにする。 ○教員間で個別の指導計画を共有し、個々の実態に応じたきめ細かい支援を行う。 ○「誰でもわかりやすく」を合い言葉に、インクルーシブな授業や学校生活ができるように工夫する。 ○生徒理解のための時間をとり、教員間で共通理解を図る。 ○通常学級で支援が必要な生徒に対して個に応じた支援をする。(TTの配慮、環境を整える。) ○特別支援学校や医療機関、放課後デイサービス等関係機関と継続して連携していく。 ○生徒の行動について、ポジティブな行動支援(PBS)を意識した支援を行っていく。	A	
③健康・安全教育・食育の推進	○健康教育の充実	○生活習慣に関するアンケートをもとに健康教育を実施した。 ○長期休業中は生活習慣リズムチェック表に取り組んだ。 ○夜遅くまでメディアを使用し、就寝時刻が遅い生徒がいる。 ○肥満・やせ・メディアについて個別指導を4名実施している。 ○普段から窓の換気や手指消毒、マスク着用など呼びかけていたが、感染症を防げなかった。 ○自転車通学頑張ろうデーを作り、呼びかけた。 ○体力向上を目指すため駅伝を行った。 ○熱中症が少なかった。	B	○引き続き、体づくりと体力向上に努める。 ○生活習慣改善に向けて、多角的視点から繰り返し指導をしていく。 ○メディアコントロールチャレンジを毎テスト前に実施する、生活習慣の向上や睡眠時間の確保に努める。 ○個別健康相談を実施する。 ○引き続き、自転車通学を呼びかける。	A	○健康や安全に関する教育がよくできている。 ○生徒のスマートフォンとの関わり方については、学校での指導と家庭でのルールを決めるなどの保護者・家庭との連携が不可欠である。特にメディアと睡眠時間との結びつきは非常に強いが、生徒自身だけではコントロールできるものではない。 ○生徒は、交通マナーを守るなど自らの命を守る行動がよくできている。 ○町内に自転車通学の際、危険と思われる箇所への対応と生徒の指導の両面を今後も継続していってほしい。
	○安全教育の充実	○教科横断的にどの学年も防災教育・安全教育が実施できた。 ○生徒や常置員会の意見を取り入れたことを元に、市と連携して危険箇所の点検・整備を行うことができた。 ○安全マップはユニバースごとに確認し、掲示を行った。 ○交通委員会で通学路の危険箇所をまとめ掲示し、自転車点検を行った。 ○交通マナーを守れている生徒が多い。 ○実際に地震が発生した際、生徒はスムーズに避難することができた。 ○毎月の交通立哨での指導は十分に行うことができず、継続的な見守り活動の実施に課題を残した。 ○一斉下校時は、交通立哨をして下校指導を行った。	B	○避難訓練の種類別(地震、火事、不審者対応)にして行う。非常階段を使用した場合も行う。 ○安全マップを見直し、複数枚作成し、掲示の工夫を行う。 ○ユニバース活動を活用し、学期に1回程度、掃除の時間を草抜き等校内整備にあてる。 ○安全マニュアルの確認を定期的に行う。	B	
	○食育の充実	○補食についての食育指導について部活動生徒を中心に行った。 ○食生活の重要性を認識し、気をつけている生徒が多い。 ○栄養教諭からの指導を行っている。 ○給食残食は市で一番少なく、野菜の残食も少ない。 ○体育委員会で残食チェックを行った。	B	○食育指導について全校生徒に向けての指導に取り組む。 ○朝食欠食の生徒が減るよう担任や委員会の生徒から呼びかけを行う。 ○給食時間の栄養指導を継続させる。 ○給食だよりの活用を行う。 ○残食チェックを定期的に行う。(給食委員会や保健委員会など)	A	
④開かれた学校教育の充実	○家庭・地域社会、関係機関との連携	○学年便り等の広報活動も毎回欠かさずに発信することができた。 ○総合の時間にゲストティーチャーを呼んでの講話をしていただくことができた。 ○2年生の職場体験学習で、地域に出向いて学習し、事後指導で作文を書かせ徳島新聞の「読者の手紙」に投稿し、掲載され、各事業所から感謝された。 ○連携校でもある阿波西高校とも授業を通して、定期的に交流を行うことができた。 ○生活アンケートなどを定期的に実施し、保護者や関係機関との連携を図った。 ○SSWやカウンセラー、適応指導教室と連携して情報を共有し、家庭訪問を活発に行うことができた。 ○メール配信を利用して、きめ細やかな情報発信をした。(アンケートの送信・回収　手紙にQRコードを載せるなど) ○学校行事において、保護者に生徒の活動を見ていただく機会を作ることができた、	A	○今後もメール配信を利用して、きめ細やかな情報発信を促進する。 (アンケートの送信・回収、手紙にQRコードを載せるなど) ○コミュニティスクールとして、学校運営に地域の声を活かす。	A	○学校と保護者との連携がとれている。 ○よりよい取組を推進しようとしている中で、教職員の時間的・物理的負担が大きいのではないかと感じる。 ○教員の不足の現状が改善されることを願う。
⑤研修の充実	○校内研修の工夫・改善と計画的な実施	○阿波西連携研究授業など計画的な研修を行うことができた。 ○メンター制度を定期的に実施することができた。 ○授業研究会では班活動を取り入れ、充実した研修を行うことができた。 ○市人権に向けて各学年ごとに指導助言者を招聘し、授業研究会を行った。	B	○今後も時宜に応じた様々な研究授業を行う。 ○メンター制度担当を複数人設けたりサブリーダーを設けたりして、研修を充実させ人材育成に努める。 ○短時間で密度の濃い授業研究会を継続して行う。 ○気軽にお互いの授業を参観できるような関係性を構築する。 ○各種研究会を定期的に行う。(人権・教科・不登校対策等) ○学びウィークを設け、授業参観を行い、教員の授業力向上に努める。	B	
⑥業務改善	○業務改善に向けた取組	○ストークと公務支援システムを全員が使用することで、業務の効率化を図ることができた。 ○職員会資料のペーパーレスやアンケートのICT活用を実施できた。 ○職朝での発言者を明確にし、時間短縮を図った。 ○ストークの回覧板を校内で有効に活用する。 ○学校で統一したノー部活動デーを設けて、研修や会議に充てた。	B	○会議時間のさらなる短縮を目指す。 ○退勤時間を意識し、職員同士で声を掛け合っていく。 ○ノー残業デーを設ける。 ○部活動方針を明確にし、徹底する。	B	